

楡の家

堀辰雄

青空文庫

第一部

一九二六年九月七日、〇村にて

菜穂子、

私はこの日記をお前にいつか読んで貰うために書いておこうと思う。私が死んでから何年か立って、どうしたのかこの頃ちつとも私と口を利きこうとはしないお前にも、もっと打ちとけて話しておけばよかったらうと思う時が来るだろう。そんな折のために、この日記を書いておいてやりたいのだ。そういう折に思いがけなくこの日記がお前の手に入るようにさせたいものだが、——そう、私はこれを書き上げたら、この山の家の中の何処どこか人目につかないところに隠して置いてやろう。……数年間秋深くなるまでいつも私が一人で居残っていたこの家に、お前はいつかお前の故に私の苦しんでいた姿をなつかしむために、しばらくの日を過しに来るようなことがあるかも知れぬ。その時までこの山の家が私の生きていた頃とそっくりそのままになっていてくれると好いが。……そうしてお前は私が好

んでそこで本を読んだり編物をしたりしていた楡^{にれ}の木陰の腰掛けに私と同じように腰を下ろしたり、又、冷えびえとする夜の数時間を暖炉の前でぼんやり過したりする。そういうような日々の或る夜、お前は何気なく私の使っていた二階の部屋にはいつて行って、ふとその一隅に、この日記を見つける。……若^もしかそんな折だったら、お前は私を自分の母としてばかりではなしに、過失もあつた一個の人間として見直してくれ、私をその人間らしい過失のゆえに一層愛してくれそんな気もするのだ。

それにしても、この頃のお前は どうしてこんなに私と言葉を交^かわすのを避けてばかりいるのかしら？ 何かお互いに傷つけ合いそんなことを私から云い出されはせぬかと恐れておいでばかりなのではない。かえつてお前の方からそういうことを云い出しそうなのを恐れておいでなのだと思えない。この頃のこんな氣づまりな重苦しい空氣が、みんな私から出たことなら、お兄さんやお前にはほんとうにすまないと思う。こうした鬱陶しい霧圍氣がますます濃くなつて来て、何か私たちには予測できないような悲劇がもちあがろうとしているのか、それとも私たち自身もほとんど知らぬ間に私たちのまわりに起り、そして何事もなかったように過ぎ去つて行つた以前の悲劇の影響が、年月の立つにつれてこんなに目立つて来たのであろうか、私にはよく分らない。——が、恐らくは、私たちにはつ

きりと気づかれずにいる何かが起りつつあるのだ。それがどんなものか分らないながら、どうやらそれらしいと感ぜられるものがある。私はこの手記でその正体らしいものを突き止めたいと思うのだ。

*

私の父は或る知名の実業家であったが、私のまだ娘の時分に、事業の上で取り返しのつかぬような失敗をした。そこで母は私の行末を案じて、その頃流行のミツシヨン・スクールに私を入れてくれた。そうして私はいつもその母に「お前は女でもしつかりしておくれよ。いい成績で卒業して外国にでも留学するようになっておくれよ」と云い聞かされていた。そのミツシヨン・スクールを出ると、私は程なくこの三村家の人となった。それで、自分はどうしても行かなくてはならないものと思ひこんでいたせいか、子供ごろに一層恐ろしい気のしていた、そんな外国なんかへは行かずにすんだ。その代り、この三村の家もその頃は、おじいさんと云うのが大へん呑気なお方で、ことに晩年は骨董こっとうなどにお凝りになり、すっかり家運の傾いた後だったので、お前のお父様と私とで、それを建て直す

のに随分苦勞をしたものだ。二十代、三十代はほとんど息もつかずに、大いそぎで通り過ぎてしまった。そうしてやつと私たちの生活も楽になり、ほっと一息ついたかと思うと、こんどはお前のお父様がお倒れになつてしまったのだ。兄の征雄ゆきおが十八で、お前が十五のときであつた。

実のところ、私はその時までお父様の方がお先立ちなされようとは想像だにしていなかった。そうして若い頃などは、私が先に死んでしまったならば、お父様はどんなにお淋しいことだろうと、そのことばかり云い暮していた程であつた。それなのにその病身の私の方が小さなお前たちとたつた三人きり取り残されてしまったのだから、最初のうちは何だかぼかんとしてしまつていた。そのうちに漸やっとはつきりと古い城かなんぞの中に自分だけで取り残されているような寂しさがひしひしと感ぜられて来た。この思いがけない出来事は、しかし、まだずいぶんと世間知らずの女であつた私には、人間の運命のはかなさを何か身にしみるように感じさせただけだつた。そうしてお父様がお亡くなりなされる前に、私に向つて「生きていたらお前にもまた何かの希望が出よう」と仰おつしやられたお言葉も、私にはただ空虚なものと思えないでいた。……

生前、お前のお父様は大抵夏になると、私と子供たちを上総かずさの海岸にやって、御自分はお勤めの都合でうちに居残つていらつしやつた。そうして、一週間ぐらい休暇をおとりになると、山がお好きだったので、一人で信濃しなのの方へ出かけられた。しかし山登りなどをなさるのではなく、ただ山の麓ふもとをドライブなどなさるのが、お好きなのであつた。……私はまだその頃は、いつも行きつけているせいか、海の方が好きだったのだけれど、お前のお父様の亡くなられた年の夏、急に山が恋しくなりだした。子供たちは少し退屈するかも知れないが、何だかそんなさびしい山の中で、一夏ぐらい誰とも逢わずに暮したかったのだ。私はその時ふとお父様がよく浅間山の麓の〇という村のことをお褒めほになつていたことを憶い出した。何でも昔は有名な宿場だったのだそうだけれど、鉄道が出来てから急に衰微し出し、今ではやつと二三十軒位しか人家がないと云う、そんな〇村に、私は不思議に心を惹ひかれた。何しろお父様が初めてその村においでになつたのは随分昔のことらしく、それまでお父様はよく同じ浅間山の麓にある外人の宣教師たちが部落しているK村にお出かけになつていたようであるが、或る年の夏、丁度お父様の御滞在中に、山つなみが起つて、K村一帯がすっかり浸水してしまつた。その折、お父様はK村に避暑していた外人の宣教師やなんかと共に、其処そこから二里ばかり離れた〇村まで避難なさつたのだつた。……その

折、昔の繁昌はんじようにひきかえ、今はすっかり寂れさび、それがいかにも落着いた、いい感じになつてゐるこの小さな村にしばらく滞在し、そしてこの村からは遠近おちこちの山の眺望が実によいことをお知りになると、それから急にお病みつきになられたのだ。そうしてその翌年からは、殆ど毎夏のように〇村にお出かけになつてゐたようだった。それから二三年するかしないうちに、そこにもぽつぽつ別荘のようなものが建ち出したという話だった。あの山つなみの折、そこに避難された方のうちにでもお父様と同じようにすっかり好きになつた者があるのだらうと笑いながら仰しやつていた。が、あんまり淋しいところだし、不便なことも不便なので、二三年人のはいつたきりで、そのまま使われずにいる別荘も少なくはないらしかつた。——そんな別荘の一つでも買って、氣に入るように修繕したら、少し不便なことさえ辛抱すれば、結構私たちにも住めるかも知れない。そう思つたものだから、私は人に頼んで手頃な家を捜して貰うことにした。

私は漸と、数本の、大きな榆にれの木のある、杉皮葺すぎかわぶきの山小屋を、五六百坪の地所ぐるみ手に入れることが出来た。風雨にさらされて、見かけはかなり傷いたんでいたけれど、小屋のなかはまだ新しくて、思つたより住み心地がよかつた。子供たちが退屈しはしないかとそれだけが心配だったが、むしろそんな山の中ではすべてのものが珍しいと見え、いろん

な花だの昆虫などを採っては大人しく遊んでいた。霧のなかで、うぐいすだの、山鳩だのがしきりなしに啼いた。^な私が名前を知らない小鳥も、私たちがその名前を知りたがるような美しい啼き声で囀った。^{さえず}流れのふちで桑の葉などを食べていた山羊の仔も、私たちの姿を見ると人なつこそうに近よってきた。そういう仔山羊とじやれあっているお前たちを見ていると、私のうちには悲しみともななともつかないような気もちがこみ上げてくるのだった。しかしその悲しみに似たものは、その頃私には殆ど快いほどのものに、それなくしては私の生活は全く空虚になるだろうと思えるほどのものになってしまっていた。

それから何やかやしているうちに数年が過ぎたのであった。とうとう征雄は大学の医科にはいった。将来何をするか、私は全く自由を選ばせて置いたのだった。が、その医科にはいった動機と云うのが、その学業に特に興味を抱いているからではなくて、むしろ物質的な気もちが主になっているのを知った時、私は、なんだか胸の痛くなるような気がした。それはこのままに暮していたのでは私たちの僅かな財産もだんだん減るばかりなので、私はそれを一人で気を揉んでいたけれど、そんな心配は一ぺんもまだ子供たちに洩らしたことなくなど無い筈であった。が、征雄はそういう点にかけては、これまでも不思議なくらい敏

感であつた。そういう征雄がどちらかと云うと一体に性質がおとなしすぎて困るのに反して、妹のお前はお前で、子供のうちから気が強かつた。何か氣に入らないことでもあると、一日中黙つておいでだつた。そういうお前が私にはだんだん氣づまりになつて来る一方だつた。最初はお前が年頃になるにつれ、ますます私に似てくるので、何だか私の考えていることが、そっくりお前に見透かされているような氣がするせいかも知れないと思つてゐた。が、そのうち私はやつと、お前と私の似ているのはほんの表面^{うわべ}だけで、私たちの意見が一致する時でも、私が主として感情からはいって行つてゐるのに、お前の方はいつも理性から来ていると云う相違に氣がつきだした。それが私たちの氣もちをどうかすると妙にちぐはぐにさせるのだろう。

たしか、征雄が大学を卒業して、T病院の助手になつたので、お前と私だけでその夏をO村に過しに行くようになった最初の年であつた。隣のK村にはそのころ、お前のお父様の生きていらした時分の知合いがだいぶ避暑に来るようになっていた。その日も、お父様のもとの同僚だつた方の、或るティ・パーティに招かれて、私はお前を伴つて、そのホテルに出かけたのだつた。まだ定刻に少し間があつたので、私たちはヴェランダに出

て待っていた。その時私はひょっくりミツシヨン・スクール時代のお友達で、今は知名のピアニストになっていられる安宅^{あたか}さんにお会いした。安宅さんはその時、三十七八の、背の高い、痩^やせぎすの男の方と立ち話をされていた。それは私も一面識のある森^{おとひこ}於菟彦さんだった。私よりも五つか六つ年下で、まだ御独身の方だけれど、brilliantという字の化身のようなそのお方と親しくお話をするだけの勇氣は私には無かった。安宅さんと何やら氣の利いた常^{じょうだん}談^{だん}を交わしていращしやるらしいのを、私たちだけは無^{ぶこつ}骨^{もの}者らしい顔をして眺めていた。しかし森さんは私たちのそんな氣持がわかりだったと見え、安宅さんが何か用事があってその場を外されると、私たちの傍に近づかれて二言三言話しかけられたが、それは決して私たちを困らせるようなお話し方ではなかった。

それで私もつい氣やすくなり、その方のお話相手になっていた。聞かれるままに私どものいる〇村のことをお話すると、大へん好奇心をお持ちになったようだった。そのうち安宅さんをお誘いしてお訪ねしたいと思えますがよろしゅうございますか、安宅さんが行かれなかつたら私一人でも参りますよ、などとまで仰^{おつ}しやつた。ほんの氣まぐれからそう仰しやつたのではなく、何だかお一人でもいらつしやりそうな氣がしたほどだった。

それから一週間ばかり立った、或る日の午後だった。私の別荘の裏の、雑木林のなかで自動車の爆音らしいものが起った。車などのはいつて来られそうもないところなのに誰がそんなところに自動車を乗り入れたのだろう、道でも間違えたのかしらと思ひながら、丁度私は二階の部屋にいたので窓から見下ろすと、雑木林の中にはさまつてとうとう身動きがとれなくなつてしまつてゐる自動車の中から、森さんが一人で降りて来られた。そして私のいる窓の方をお見上げになつたが、丁度一本の榆の木の陰になつて、向うでは私にお氣づきにならないらしかつた。それに、うちの庭と、いまあの方の立つていらつしやる場所との間には、薄^{すすぎ}だの、細かい花を咲かせた灌^{かんぼく}木だのが一面に生ひ茂つていた。——そのため、間違つた道へ自動車を乗り入れられたあの方は、私の家のすぐ裏の、ついそこまで来ていながら、それらに遮^{さへぎ}られて、いつまでもこちらへいらつしやれずにいた。それ私には心なしか、なんだかお一人で私のところへいらつしやるのを躊躇^{ちゆうちよ}躇なさつていられるようにも思へた。

私はそれから階^{した}下へ降りていつて、とり散らかした茶テーブルの上などを片づけながら、何喰わぬ顔をしてお待ちしていた。やつと榆の木の下に森さんが現われた。私ははじめて氣がついたように、惶^{あわ}ててあの方をお迎えした。

「どうも、飛んだところへはいり込んでしまいました……」

あの方は、私の前に突立ったまま、灌木の茂みの向うにまだ車体の一部を覗かせながら、しきりなしに爆音を立てている車の方を振り向いていた。

私はともかくあの方をお上げて置いて、それからお隣りへ遊びに行っているお前を呼びにでもやろうと思っっているうちに、さつきからすこし怪しかった空が急に暗くなって、いまにも夕立の来そうな空合いになった。森さんは何だか困ったような顔つきをなさって、

「安宅さんをお誘いしたら、何だか夕立が来そうだから厭だいやと云っていましたが、どうも安宅さんの方が当たったようですね……」

そう云われながら、絶えずその暗くなった空を気になさっていた。

向うの雑木林の上方に、いちめんに古綿のような雲が掩おおいかぶさっていたが、一瞬間、稲妻がそれをジグザグに引き裂いた。と思うと、そのあたりで凄まじい雷鳴がした。それから突然、屋根板に一つかみの小石が絶えず投げつけられるような音がしだした。……私たちはしばらくうつけたように、お互いに顔を見合せていた。それは非常に長い時間に見えた。……それまでちよつとエンジンの音を止めていた自動車が、不意に野獣のようにあ

ばれ出した。木の枝の折れる音が続けさまに私たちの耳にもはいった。

「だいぶ木の枝を折ったようすな……」

「うちのだか何処どこのだか分らないんですから、ようございますわ」

稲妻がときどき枝を折られたそれらの灌木を照らしていた。

それからまだしばらく雷鳴がしていたが、やつとのことで向うの雑木林の上方がうつすらと明るくなりだした。私たちは何だかほつとしたような氣持がした。そうしてだんだん草の葉が日にひかり出すのをまぶしそうに見ていると、又しても、屋根板にぱらぱらと大きな音がしだした。私たちは思わず顔を見合せた。が、それは楡の木の葉のしづくする音だった……

「雨が上ったようすから、少しそこいらを歩いて御覧になりませんか？」

そう云つて私はあの方と向い合つた椅子からそつと離れた。そうしてお隣りへお前を迎えにやつて置いて、一足先に、村のなかを御案内していることにした。

村は丁度養蚕の始まつている最中だった。家並みは皆で三十軒足らずで、その上大抵の家はいまにも崩壊しそうで、中にはもう半ば傾き出しているのさえあつた。そんな廃屋に近いものを取り囲みながら、ただ豆畑や唐黍畑とうきびばたけだけは猛烈に繁茂していた。それは私

たちの気もちに妙にこたえて来るような眺めだった。途中で、桑の葉を重たそうに背負つてくる、汚れた顔をした若い娘たちと幾人もすれちがいながら、私たちはとうとう村はずれの岐^{わか}れ道まで来た。北よりには浅間山がまだ一面に雨雲をかぶりながら、その赤らんだ肌をとどころ^{のぞ}覗かせていた。しかし南の方はもうすっかり晴れ渡り、いつもよりちかぢかと見える真向うの小山の上に捲き雲が一かたまり残っているきりだった。私たちが其処にぼんやりと立ったまま、気持ちよさそうにつめたい風に吹かれていると、丁度その瞬間、その真向うの小山のてっぺんから少し手前の松林にかけて、あたかもそれを待ち設けでもしていたかのように、一すじの虹^{にじ}がほのかに見えだした。

「まあ綺麗な虹なこと……」思わずそう口に出しながら私はパラソルのなかからそれを見上げた。森さんも私のそばに立ったまま、まぶしそうにその虹を見上げていた。そうして何だか非常に穏やかな、そのくせ妙に興奮なさっていらっしやるような面持をしていられた。

そのうち向うの村道から一台の自動車が光りながら走って来た。その中で誰かが私たちに向って手をふっているのが認められた。それは森さんのお車に乗せて貰って来たお前とお隣りの明^{あきら}さんだった。明さんは写真機を持っていらしった。そうしてお前が耳打ちする

と、明さんはその写真機をあの方に横から向けたりした。私は叱言こいごも言えずに、はらはらしてお前たちのそんな子供らしいはしやぎ方を見ているよりしうがなかった。あの方はしかしそれにはお氣がつかないような様子をなすつて、すこし神経質そうに足もとの草をステツキで突ついたり、ときどき私と言葉を交かわしたりしながら、お前たちに撮られるがままになつていられた。

それから三四日、午後になると、一ぺんはきまつて夕立がした。夕立はどうも癖になるらしい。その度毎に、はげしい雷鳴もした。私は窓ぎわに腰かけながら、楡にれの木ごしに向うの雑木林の上にひらめく無気味なデッサンを、さも面白いものでも見るように見入っていた。これまではあんなに雷を恐こがった癖に。……

翌日は、霧がふかく、終日、近くの山々すら見えなかった。その翌日も、朝のうちはふかい霧がかかっていたが、正午近くなつてから西風が吹き出し、いつのまにか氣もちよく晴れ上つた。

お前は二三日前からK村に行きたがつておいでだったが、私はお天氣がよくなつてからにしたらと云つて止めていたところ、その日もお前がそれを云い出したので、「なんだか

今日は疲れていて、私は行きたくないから、それじゃ、明さんに一緒に行っていただきたいら……」と私は勧めて見た。最初のうちは、「そんなら行きたくはないわ」と拗^すねておいでだったが、午後になると、急に機嫌を直して、明さんを誘って一緒に出かけていった。

が、一時間もするかしないうちに、お前たちは帰って来てしまった。あんなに行きたがっていた癖に、あんまり帰りが早過ぎるし、お前がなんだか不機嫌そうに顔を赤くし、いつも元気のいい明さんまでが、すこし鬱^{ふさ}いでいるように見えるので、途中で、お前たちの間に、何か気まずいことでもあったのかしらと私は思った。明さんは、その日はおあがりにもならないで、そのまますぐ帰って行かれた。

その晩、お前は私にその日の出来事を自分から話し出した。お前はK村に行くと、真つ先に森さんのところへお寄りする気になって、ホテルの外で明さんに待っていただいて、一人で中にはいつていった。丁度午餐^{ごしさん}後だったので、ホテルの中はひっそりとしていた。ボオイらしいものの姿も見えないので、帳場で居眠りをしていた背広服の男に、森さんの部屋の番号を教わると、一人で二階に上っていった。そして教わった番号の部屋のドアを叩くと、中からあの方らしい声がしたので、いきなりそのドアを開けた。お前をボオイかなんかだと思われていたらしく、あの方はベッドに横になったまま、何やら本を読んでい

た。お前がはいってゆくを見ると、あの方はびっくりなさったように、ベッドの上に坐り直された。

「おやすみだったんですか？」

「いいえ、こうやって本を読んでいただけなんです」

そう云いながら、あの方はしばらくお前の背後にじっと眼をやっていた。それからやつと気がついたように、

「おひとりなんですか？」とお前にきいた。

「ええ……」お前はなんだか当惑しながら、そのまま南向きの窓のふちに近よっていった。

「まあ、山百合がよくにおいますこと」

すると、あの方もベッドから降りていらしって、お前のとおりにお立ちになった。

「私はどうもそれを嗅いでいると頭痛がしてくるんです」

「お母さんも、百合のにおいはお嫌いよ」

「お母さんもね……」

あの方は何故かしらひどく素気のない返事をなさった。お前は少しむっとした。……その時、向うの亭の木蔭のからんだ四目垣ごしに、写真機を手にした明さんの姿がちらち

らと見えたり隠れたりしているのにお前は気がついた。あんなにホテルの外で待っているとお前に固く約束しておきながら、いつのまにかホテルの庭へはいり込んでいるそんな明さんの姿を認めると、お前はお前の幾分こじれた気もちを今度は明さんの方へ向けだしていた。

「あれは明さんでしょう？」

あの方はそれに気がつく、いきなりお前にそう仰しやった。そうしてそれから急になんだかお前に興味をお持ちになったように、じっとお前を見つめ出した。お前は思わず真つ赤な顔をして、あの方の部屋を飛び出してしまった。……

そんな短い物語を聞きながら、私はお前は何てまあ子供らしいんだろうと思った。そしてそれがいかにも自然に見えたので、この頃どうかするとお前は妙に大人びて見えたりしたのは全く私の思い違いだったのかしらと思われる位であった。そうして私はお前自身にもよく分らないらしかった、あの時の羞^はずかしさとも怒りともつかないものの原因をそれ以上知ろうとはしなかった。

それから数日後、東京から電報が来て、征雄が腸カタルを起して寝こんでいるから、誰

か一人帰ってくれというので、とりあえずお前だけが帰京した。お前の出発したあとへ、森さんからお手紙がきた。

先日はいろいろ有難うございました。

〇村は私もたいへん好きになりました。私もああいうところに隠遁いんとんできたらと柄にないことまで考えています。然しこの頃の気もちは却って再び二十四五になったような、何やら訳の分らぬ興奮を感じている位です。

殊にあの村はずれで御一緒に美しい虹を仰いだときは、本当にこれまで何やら行き詰っていたように暗澹あんたんとしていた私の気もちも急に開けだしたような気がしました。これは全くあなたのお陰だと思っております。あの折、私は或る自叙伝風な小説のヒントをまで得ました。

明日、私は帰京いたす積りですが、いずれ又、お目にかかってゆっくりお話したいと思います。数日前お嬢さんが見えになりましたが、私の知らない間に、お帰りになっていました。どうなさったのですか？

私がこの手紙を読むそばに、若しお前がおいでだったら、私にはこの手紙はもつと深い意味のものにとれたかも知れない。しかし、私一人きりだったことが、読んだあとで平気でそれを他の郵便物と一緒に机の上に放り出させて置いた。それが私にこの手紙をごく何でもないもののように思い込ませてくれた。

同じ日の午後、明さんがいらして、お前がもう帰京されたことを知ると、そんな突然の出発が何だか御自分のせいではないかと疑うような、悲しそうな顔をして、お上りにもならず帰って行かれた。明さんはいい方だけれど、早くから両親を失くなされたせいかな、どうもすこし神経質すぎるようだ。……

この二三日で、ほんとうに秋めいて来てしまった。朝など、こうして窓ぎわに一人きりで何ということなしに物思いに耽^{ふけ}っていると、向うの雑木林の間からこれまではぼんやりとしか見えなかった山々の巒^{ひだ}までが一つ一つくつきりと見えてくるように、過ぎ去った日々のとりとめのない思い出が、その微細なものまで私に思い出されてくるような気がする。が、それはそんな気もちのするだけで、私のうちにはただ、何とも云いようなない悔いのようなものが湧いてくるばかりだ。

日暮どきなど、南の方でしきりなしに稲光りがする。音もなく。私はぼんやり頬杖^{ほおづえ}を

ついで、若い頃よくそうする癖があつたように窓硝子に自分の額を押しつけながら、それを飽かずに眺めている。痙攣^{けいれん}的に目^またたきをしている、蒼^{あお}ざめた一つの顔を硝子の向うに浮べながら……

*

その冬になつてから、私は或る雑誌に森さんの「半生」という小説を読んだ。これがあのO村で暗示を得たと仰^{おつ}しやつていた作品なのであると思われた。御自分の半生を小説的にお書きなさろうとしたものらしかったが、それにはまだずっとお小さい時のことしか出て来なかつた。そういう一部分だけでも、あの方がどういうものをお書きになろうとしているのか見当のつかない事もなかつた。が、この作品の調子には、これまであの方の作品について見たことのないような不思議に優鬱^{ううつ}なものがあつた。しかしその見知らないものは、ずっと前からあの方の作品のうちに深く潜在していたものであつて、唯、われわれの前にあの方の伴^{いっわ}られていた brilliant な調子のためすっかり掩^{おほ}いかくされていたに過ぎないように思われるものだつた。——こういう生^{なま}な調子でお書きになるのはあの方としては

大へんお苦しいだろうとはお察しするが、どうか完成なさるようにと心からお祈りしていた。が、その「半生」は最初の部分が発表されたきりで、とうとうそのまま投げ出されたようだった。それは何か私にはあの方の前途の多難なことを予感させるようではなかった。

二月の末、森さんがその年になつてからの初めてのお手紙を下さった。私の差し上げた年賀状にも返事の書けなかつたお詫びやら、暮からずつと神経衰弱でお悩みになつていられることなど書き添えられ、それに何か雑誌の切り抜きのようなものを同封されていた。何気なくそれを披いてみると、それは或る年上の女に与えられた一聯の恋愛詩のようなものであつた。何だつてこんなものを私のところにお送りになつたのかしらといぶかりながら、ふと最後の一節、——「いかで惜しむべきほどのわが身かは。ただ憂う、君が名の……」という句を何の事やら分らずに口ずさんでいるうち、これはひよつとすると私に宛てられたものかも知れないと思い出した。そう思うと、私は最初何とも云えずばつの悪いような気がした。——それから今度は、それが若し本当にそうなのなら、こんなことをお書きになつたりしては困ると云う、ごく世間並みの感情が私を支配し出した。……たとえば、そういうお気持がおりだつたにせよ、そのままそつとしておいたら、誰も知らず、私も

知らず、そして恐らくあの方自身も知らぬ間にそれは忘れ去られ、葬られてしまうにちがいない。何故そんな移ろい易いようなお氣持を、こんな婉えんきよく曲まがな方法にせよ、私にお打ち明けになったのだろうか？ いままでのように、向うもこちらもそういう氣持を意識せずにおつきあいしているのならいいが、いったん意識し合った上では、もうこれからはお逢いすることさえ出来ない。……

そうして私はあの方のそんな一人よがりをお責めしたい氣もちで一ぱいになっていた。しかし、そういうあの方を私はどうしても憎むような氣もちにはなれなかった。そこに私の弱みがあったように思われる。……が、私はその数篇の詩が私に宛てられたものであることを知り得るのは、恐らく私一人ぐらいなものであるうことに氣がつくと、何かほつとしながら、その紙片を破らずに自分の机ひきだの抽出ひきだしのずっと奥の方に藏しまつてしまった。そうして私は何ともないような風をしていた。

丁度、お前たちと夕方の食事に向っている時だった。私はスープを啜すすろうとしかけたとき、ふとあの紙片が「昴スバル」からの切り抜きであったことを憶い出した。（それまでもそれに氣がついていたが、それが何の雑誌だろうと私は別に問題にしていなかったのだ。）そしてその雑誌なら、毎号私のところにも送つてきてある筈だが、この頃手にもとらずに放

つてあるので、若しかしたら私の知らぬ間に、兄さんはともかく、お前はもうその詩を読んでいるかも知れなかった。これは飛んでもないことになった、と私ははじめて考え出した。何だか気のせいかな、お前はさつきから私の方を見て見ないふりをしておいでのようにならなかった。すると突然、私のうちに誰にともつかない怒りがこみ上げてきた。しかし私はいかにも虔^{つつ}ましそうにスウプの匙^{さじ}を動かしていた。……

その日からというものの、私はあの方が私のまわりにお拡げになった、見知らない、なんとなく胸苦しいような雰囲気の中に暮しだした。私のお逢いする人達といえど、誰もかもみんなが私を何かげんそうな顔をして見ているような気がされてならなかった。そうしてそれから数週間というものは、私はお前たちに顔を合わせるのさえ避けるようにして、自分の部屋に閉じ籠^{こも}っていた。私はただじっとして私の身に迫ろうとしている何やら私にも分らないものから身はずししながら、それが私たちの傍を通り過ぎてしまうのを待つてゐるより他はないような気がした。とにかくそれを私たちの中にはいりこませ、縛^{もつ}れさせさえしなければ、私たちは救われる。そう私は信じていた。

そうして私はこんな思いをしているよりも一層のこと早く年をとってしまえたらとさえ

思った。自分さえもつと年をとってしまい、そうしてもう女らしくなくなってしまうたら、たとえ何処であの方とお逢いしようとも、私は静かな気もちでお話が出来るだろう。――しかし今の私は、どうも年が中途半端なのがいけないのだ。ああ、一ぺんに年がとってしまえるものなら……

そんなことまで思いつめるようにしながら、私はこの日頃、すこし前よりも痩^やせ、静脈のいくぶん浮きだしてきた自分の手をしげしげと見守っていることが多かった。

その年は空梅^{からつゆ}雨であつた。そうして六月の末から七月のはじめにかけて、真夏のように暑い日照りが続いていた。私はめつきり身体^{からだ}が衰えたような気がし、一人だけ先に、早目に〇村に出かけた。が、それから一週間するかしないうちに、急に梅雨気味の雨がふりだし、それが毎日のように降り続いた。間^{かん}歇^{けつ}的に小止みにはなつたが、しかしそんなときは霧がひどくて、近くの山々すら殆どその姿を見せずにいた。

私はそんな鬱陶しいお天気をかえって好いことにしていた。それが私の孤独を完全に守っていてくれたからだつた。一日は他の日に似ていた。ひえびえとした雨があちらこちらに溜^たまっている楡^{にれ}の落葉を腐らせ、それを一面に臭わせていた。ただ小鳥だけは毎日異つ

たのが、かわるがわる、庭の梢こずえにやってきて異った声で啼ないていた。私は窓に近よりながら、どんな小鳥だろうと見ようとすると、この頃すこし眼が悪くなってきたのか、いつまでもそれが見あたらずにいることがあった。そのことは半ば私を悲しませ、半ば私の気に入った。が、そうしていつまでもうつけたように、かすかに揺れ動いている梢を見上げていると、いきなり私の眼の前に、蜘蛛くもが長く糸をひきながら落ちてきて、私をびっくりさせたりした。

そのうちに、こんなに悪い陽気だけれど、ぼつぼつと別荘の人たちも来だしたらしい。二三度、私は裏の雑木林のなかを、淋しそうにレエンコートをひっかけたきりで通って行く明さんらしい姿をお見かけしたが、まだ私きりなことを知っていらつしやるからか、いつもうちへはお立寄りにならなかった。

八月にはいつても、まだ梅雨じみた天候がつづいていた。そのうちにお前もやって来たし、森さんがまたK村にいらつているとか、これからいらつしやるのだとか、あんまりはつきりしない噂うわさを耳にした。何故なぜまたこんな悪い陽気だのにあの方はいらつしやるのかしら？ あそこまでいらつしたら、こちらへもお見えになるかも知れないが、私はいまのような気もちではまだお目にかからない方がいいと思う。しかしそんな手紙をわざわざ差

し上げるのも何だから、いらしたらいらしたでいい、その時こそ、私はあの方によくお話をしよう。その場に菜穂子と呼んで、あの子によく納得できるように、お話をしよう。何を云おうかななどは考えない方がいい。放っておけば、云うことはひとりで出てくるものだ……。

そのうちときどき晴れ間も見えるようになり、どうかすると庭の面にうつすらと日の射し込んでくるようなこともあった。すぐまたそれは翳^{かげ}りはしたけれど。私は、この頃庭の真んなかの楡の木の下に丸木のベンチを作らせた、そのベンチの上に楡の木の影がうつすらとあたったり、それがまた次第に弱まりながら、だんだん消えてゆきそうになる——そういう絶え間のない変化を、何かに怯^{おび}やかされているような気もちがしながら見守っていた。あたかもこの頃の自分の不安な、落ちつかない心をそっくりそのままそれに見出しでもしているように。

それから数日後、かあつと日の照りつけるような日が続きました。しかしその日ざしはすでに秋の日ざしであった。まだ日中はとても暑かったけれども。——森さんが突然お見

えになったのは、そんな日の、それも暑いさかりの正午近くであった。

あの方は驚くほど憔悴^{しょうすい}なすつていられるように見えた。そのお痩せ方やお顔色の悪いことは、私の胸を一ぱいにさせた。あの方にお逢いするまでは、この頃、目立つほど老^ふけだした私の様子を、あの方がどんな眼でお見になるかとかなり気にもしていたが、私はそんなことはすっかり忘れてしまった位であった。そうして私は気を引き立てるようにしてあの方と世間並みの挨拶などを交^かわしているうちに、その間私の方をしげしげと見ていらつしやるあの方の暗い眼ざしに私の寥^{やっ}れた様子があの方をも同じように悲しませているらしいことをやつと気づき出した。私は心の圧しつぶされそうなのをやつと耐^{こら}えながら、表面だけはいかにももの静かな様子を伴^{いっわ}っていた。が、私にはその時それが精一ぱいで、あの方がいらしたらお話をしようと決心していたことなどは、とてもいま切り出すだけの勇氣はないように思えた。

やつと菜穂子が女中に紅茶の道具を持たせて出て来た。私はそれを受取つて、あの方にお勧めしながら、お前が何かあの方に無愛想なことでもなさりはすまいかと、かえつてそんなことを気にしていた。が、その時、私の全く思いがけなかったことには、お前はいかにも機嫌よさそうに、しかも驚くほど巧みな話しぶりであの方の相手をなさり出したのだ。

この頃自分のことばかりにこだわっていて、お前たちのことはちつとも構わずにいたことを反省させられたほど、そのときのお前のおとなびた様子は私には思いがけなかった。――そう云うお前を相手になさっている方があの方にもよほど気軽だと見え、私だけを相手にされていた時よりもずっと御元氣になられたようだった。

そのうちに話がちよつと途絶えると、あの方はひどくお疲れになっていられるような御様子なのに、急に立ち上られて、もう一度去年見た村の古い家並みが見てきたいと仰おつしやられるので、私たちもそこまでお伴ともをすることにした。しかし丁度日ざかりで、砂の白く乾いた道の上には私たちの影すらほとんど落ちない位だった。ところどころに馬糞ばふんが光っていた。そうしてその上にはいくつも小さな白い蝶がむらがっていた。やっと村にはいると、私たちはときどき日を除よけるため道ばたの農家の前に立ち止って、去年と同じように蚕を飼っている家のなかの様子を窺うかがったり、私たちの頭の上にも崩れて来そうな位に傾いた古い軒の格子を見上げたり、又、去年まではまだ僅かに残っていた砂壁がいまはもう跡方もなくなつて、其処そこがすっかり唐黍畑とうきびばたけになつてゐるのを認めたりしながら、何ということなしに目を見合せたりした。とうとう去年の村はずれまで来た。浅間山は私たちのすぐ目の前に、気味悪いくらい大きい感じで、松林の上にくつきりと盛り上つて

いた。それには何かそのときの私の気もちに妙にこたえてくるものがあつた。

暫くの間、私たちはその村はずれの分れ道に、自分たちが無言でいることも忘れたように、うつけた様子で立ちつくしていた。そのとき村の真ん中から正午を知らせる鈍い鐘の音が出し抜けに聞えてきた。それがそんな沈黙をやっと私たちにも気づかせた。森さんはときどき気になるように向うの白く乾いた村道を見ていられた。迎えの自動車がもう来る筈だつたのだ。――やがてそれらしい自動車が猛烈な埃ほこりを上げながら飛んで来るのが見え出した。その埃を避けようとして、私たちは道ばたの草の中へはいった。が、誰ひとりその自動車を呼び止めようともしないで、そのまま草の中にぼんやりと突立っていた。それはほんの僅かな時間だつたのだろうけれど、私には長いことのように思えた。その間私は何か切ないような夢を見ながら、それから醒さめたいのだが、いつまでもそれが続いている醒められないような気さえしていた。……

自動車は、ずっと向うまで行き過ぎてから、やっと私たちに気がついて引つ返して来た。その車の中よろめくようにお乗りになつてから、森さんは私たちの方へ帽子にちよつと手をかけて会釈されたきりだつた。……その車が又埃を上げながら立ち去つた後も、私たちは二人ともパラソルでその埃を避けながら、何時いつまでも黙つて草の中に立っていた。

去年と同じ村はずれでの、去年と殆ど同じような分れ、——それなのに、まあ何と去年のそのときとは何もかもが變つてしまっているのだらう。何が私たちの上に起り、そして過ぎ去つたのであらう？

「さつき此処ここいらで昼顔を見たんだけど、もうないわね」

私はそんな考えから自分の心を外らせようとして、殆ど口から出まかせに云つた。

「昼顔？」

「だって、さつき昼顔が咲いていると云つたのはお前じゃなかった？」

「私、知らないわ……」

お前は私の方をけげんそうに見つめた。さつきどうしても見たような氣のしたその花は、しかし、いくらそこらを眼で捜して見てももう見つからなかった。私にはそれが何だかひどく奇妙なことのようと思われた。が、次ぎの瞬間にはこんなことをひどく奇妙に思つたりするのは、よほど私自身の氣もちがどうかしているのだらうという氣がしだしていた。

……

それから二三日するかしないうちに、森さんからこれから急に木曽の方へ立たれると云

うお端書^{はがき}をいただいた。私はあの方にお逢いしたらあれほどお話しておこうと決心していたのが、変にはぐれてしまったのを何か後悔したいような気もちであった。が、一方では、ああやって何事もなかったようにお逢いし、そうして何事もなかったようにお分れたのもかえって好いことだったかも知れない、——そう、自分自身に云って聞かせながら、いくぶん自分に安心を強^しいるような気もちでいた。そうしてその一方、私は、自分たちの運命にも関するような何物かが——今日でなければ、明日にもその正体のはつきりとなりそうな、しかしそうなることが私たちの運命を好くさせるか、悪くさせるかそれすら分らないような何物かが——一滴の雨をも落さずに村の上を過^{よぎ}つてゆく暗い雲のように、自分たちの上を通り過ぎていつてしまふようにと希^{ねが}つていた。……

或る晩のことであつた。私はもうみんなが寝静まつたあと、何だか胸苦しくて眠れそうもなかった。一人でこっそり戸外に出て行つた。そうして、しばらく真つ暗な林の中を一人で歩いていくうちに漸く心もちが好くなつて来たので、家の方へ戻つて来ると、さつき出がけにみんな消して来た筈の広間の電気が、いつの間にか一つだけ点^ついているのに気がついた。お前はもう寝てしまつたとばかり思つていたので、誰だろうと思ひながら、楡の木の下にちよつと立ち止つたまま見ていると、いつも私のすわりつけている窓ぎわで、

私がよくそうしているように窓硝子に自分の額を押しつけながら、菜穂子がじつと空を見つめているらしいのが認められた。

お前の顔は殆ど逆光線になつていたので、どんな表情をしているのか全然分らなかったが、楡の木の下に立つてゐる私にも、お前はまだ少しも気づいていないらしくった。――

そういうお前の物思わしげな姿はなんだかそんなときの私にそっくりのような気がされた。

その時、一つの想念が私をとらえた。それはさつき私が戸外に出て行つたのを知ると、

お前は何か急に気がかりになつて、其処へ下りて来て、私のことをずっと考えておいでだつたにちがいないと云う想念であつた。恐らくお前はそれと知らずにそんな私とそっくりな姿勢をしているのだろうが、それはお前が私のことを立ち入って考えているうちに知らず識らず私と同化しているためにちがひなかつた。いま、お前は私のことを考えておいでなのだ。もうすっかりお前の心のそとへ出て行つてしまつて、もう取り返しのつかなくなつたものでもあるかのように、私のことを考えておいでなのだ。

いいえ、私はお前の傍から決して離れようとはしませぬ。それだのにお前の方でこの頃私を避けよう避けようとしてばかりいる。それが私にまるで自分のことを罪深い女かなんぞのように怖れさせ出しているだけなのだ。ああ、私たちはどうしてもっと他の人達のよ

うに虚心に生きられないのかしら？……

そう心の中でお前に訴えかけながら、私はいかにも何気ないように家の中にはいつて行き、無言のままでお前の背後を通り抜けようとすると、お前はいきなり私の方を向いて、殆どなじるような語気で、

「何処へ行つていらしたの？」と私に訊^きいた。私はお前が私のことでどんなに苦^{にが}い気持ちにさせられているかを切ないほどはつきり感じた。

第二部

一九二八年九月二十三日、〇村にて

この日記に再び自分が戻って来ることがあるなどとは私はこの二三年思つてもみなかつた。去年のいま頃、この〇村でふとしたことから暫く忘れていたこの日記のことを思い出させられて、何とも云えない慚愧ざんぎのあまりにこれを焼いてしまおうかと思つたことはあつた。が、そのときそれを焼く前に一度読み返しておこうと思つて、それすらためらわれているうちに焼く機会さえ失つてしまった位で、よもや自分がそれを再び取り上げて書き続けるような事になろうとは思わなかつたのである。それをこうやって再び自分の気持に鞭むちうつようにしながら書き続けようとする理由は、これを読んでゆくうちにお前には分つていただけるのではないかと思う。

森さんが突然北京で^{ベキン}お逝^なくなりになったのを私が新聞で知ったのは、去年の七月の朝から息苦しいほど暑かった日であった。その夏になる前に^{ゆきお}征雄は台湾の大学に赴任したばかりの上、丁度お前もその数日前から一人で〇村の山の家に出掛けており、^{ぞうし}雑司ヶ谷ののだっ広い家には私ひとりきり取り残されていたのだった。その新聞の記事で見ると、この一箇年殆ど支那でばかりお暮しになって、作品もあまり発表せられなくなっていられた森さんは、古い北京の或る物静かなホテルで、^{しゆくあ}宿痼のために数週間病床に就かれたまま、何者かの来るのを死の直前まで待たれるようにしながら、^{むな}空しく最後の息を引きとって行かれたとの事だった。

一年前、何者かから逃^{のが}れるように日本を去られて、支那へ赴かれてからも、二三度森さんは私のところにもお便りを下すった。支那の外のところはあまりお好きでないらしくかったが、都市全体が「古い森林のような」感じのする北京だけはよほどお気に入られたと見え、自分はどういうところで孤独な晩年を過しながら誰にも知られずに死んでゆきたいな^{じようだん}どと御常談のようにお書きになって寄こされたこともあったが、まさか今が今こんな事になろうとは私には考えられなかった。或いは森さんは北京をはじめて見られてそんな事を私に書いてお寄こしになったときから、既に御自分の運命を見透されていたのかも知

れなかった。……

私は一昨々年の夏、〇村で森さんにお会いしたきりで、その後はときおり何か人生に疲れ切ったような、同時にそういう御自分を自じちよう嘲せられるような、いかにも痛々しい感じのするお便りばかりをいただいていた。それに対して私などにあの方をお慰めできるような返事などがどうして書けたらう？ 殊に支那へ突然出立される前に、何か非常に私にもお逢いになりたがつていられたようだったが（どうしてそんな心の余裕がおりになったのかしら？）、私はまだ先の事があつてからあの方にさっぱりとした気持でお逢い出来なような気がして、それは婉えんきよく曲におことわりした。そんな機会にでももう一度お逢いしていたら、と今になって見れば幾分悔まれる。が、直接お逢いしてみたところで、手紙以上のことがどうしてあの方に向つて私に云えただらう？……

森さんの孤独な死について、私がともかくもそんな事を半ば後悔めいた気持でいろいろ考え得られるようになったのは、その朝の新聞を見るなり、急に胸を圧おしつけられるようになって、気味悪いほど冷汗を掻いたまま、しばらく長椅子の上に倒れていた。そんな突然私を怯おびやかした胸の発作がどうにか鎮まってからであつた。

思えば、それが私の狭心症の最初の軽微な発作だったのだろうが、それまではそれにつ

いて何の予兆もなかったので、そのときはただ自分の驚愕きょうがくのためかと思った。そのとき自分の家に私ひとりきりであつたのが却つて私にはその発作に対して無頓着でいさせたのだ。私は女中も呼ばず、しばらく一人で我慢していてから、やがてすぐ元通りになった。私はそのことは誰にも云わなかった。……

菜穂子、お前は〇村で一人きりでそういう森さんの死を知ったとき、どんな異常な衝動を受けたであろうか。少なくともこのときお前はお前自身のことよりか私のことを、——それから私が打ちのめされながらじつとそれを耐えている、見るにも見かねるような様子を半ば気づかいながら、半ば苦々しく思いながら一人で想像していたろうことは考えられる。……が、お前はそれに就いては全然沈黙を守っており、これまではほんの申訳のように書いてよこした端書の便りさえそのとききり書いてよこさなくなってしまった。私にはこのときはその方が却つて好かつた。自然なようにさえ思えた。あの方がもうお亡くなりになった上は、いつかはあの方の事に就いてもお前と心をひらいて語り合うことも出来よう。——そう私は思つて、そのうち私達が〇村でも一しよに暮しているうちに、それを語り合うに最もよい夕のあることを信じていた。が、八月の半ば頃になって溜たまつていた用事が片づいたので、漸やっとの事で〇村へ行けるようになった私と入れちがいにお前が前も

って何も知らせずに東京へ帰つて来てしまったことを知ったときは、さすがの私もすこし憤慨した。そうして私達の不和ももうどうにもならないところまで行っているのをその事でお前に露に見せつけられたような気がしたのだった。

平野の真ん中の何処かの駅と駅との間で互いにすれちがったまま、私はお前と入れ代つて〇村で爺やたちを相手に暮すようになり、お前もお前で、強情そうに一人きりで生活し、それから一度も〇村へ来ようとはしなかったので、それなり私達は秋まで一遍も顔を合わせずにしまった。私はその夏も殆ど山の家に関じこもったままでいた。八月の間は、村をあちこちと二三人ずつ組んで散歩をしている学生たちの白^{しろがすりすがた} 緋^ひ 姿^{すがた}が私を村へ出てゆくことを億劫^{おっくう}にさせていた。九月になつて、その学生たちが引き上げてしまうと、例年のように霖雨^{りんう}が来て、こんどはもう出ようにも出られなかった。爺やたちも私があんまり所在なさそうにしているので陰では心配しているらしかったが、私自身にはそうやって病後の人のように暮しているのが一番好かった。私はときどき爺やの留守などに、お前の部屋にはいつて、お前が何気なくそこに置いていった本だとか、その窓から眺められるかぎりの雑木の一本々々の枝ぶりなどを見ながら、お前がその夏の部屋でどういう考えをもつて暮していたかを、それ等のものから読みとろうとしたりしながら、何か切ないもの

で一ぱいになって、知らず識らずの裡に其処で長い時間を過していることがあった。……

そのうちに雨が漸やっとの事で上つて、はじめて秋らしい日が続き出した。何日も何日も濃い霧につつまれていた山々や遠くの雑木林が突然、私達の目の前にもう半ば黄ばみかけた姿を見せ出した。私はやっぱり何かほつとし、朝夕、あちこちの林の中などへ散歩に行くことが多くなつた。余儀なく家にばかり閉じこもらされていたときはそんな静かな時間を自分に与えられたことを有難がつていたのだったけれど、こうして林の中を一人で歩きながら何もかも忘れ去つたような気分になつていると、こういう日々もなかなか好く、どうしてこの間まではあんなに陰気に暮していられたのだろうと我ながら不思議にさえ思われにくる位で、人間というものは随分勝手なものだと私は考えた。私の好んで行つた山よりの落葉松林は、ときおり林の切れ目から薄赤い穂を出した芒すすきの向うに浅間の鮮やかな山肌をのぞかせながら、何処どこまでも真直に続いていた。その林がずっと先の方でその村の墓地の横手へ出られるようになってゐることは知っていたけれど、或る日私は好い気持ちになつて歩いてゐるうちにその墓地近くまで来てしまい、急に林の奥で人ごえのするのに驚いて、惶あわててそこから引つ返して来た。丁度その日はお彼岸の中日だったのだ。私はその帰り道、急に林の切れ目の芒の間から一人の土地の者らしくない身なりをした中年の女が出

てきたのにばったりと出会った。向うでも私のような女を見てちよつと驚いたらしかつたが、それは村の本陣のおようさんだつた。

「お彼岸だものですから、お墓詣りに一人で出て来たついでに、あんまり気持が佳いのでつい何時までも家に帰らずにふらふらしていました。」おようさんは顔を薄赤くしながらそう云つて何気なさそうな笑ひ方をした。「こんなのにんびりとした氣持になれたことはこの頃滅多にないことです。……」

おようさんは長年病身の一人娘をかかえて、私同様、殆ど外出することもないらしいので、ここ四五年と云うものは私達とはときおりお互いの噂を聞き合う位で、こうして顔を合わせたことはついぞなかったのだ。私達はそれだものだから、なつかしそうについ長い立ち話をして、それから漸くの事で分れた。

私は一人で家路に著きながら、途々、いま分れてきたばかりのおようさんが、数年前に逢つたときから見ると顔など幾分老けたようだが、私とは只の五つ違いとはどうしても思われぬ位、素振りなどがいかにも娘々しているのを心に蘇らせているうちに、自分などの知っているかぎりだけでも随分不為合せな目にばかり逢つて来たらしいのに、いくら勝気だとはいえ、どうしてああ単純な何気ない様子をしていられるのだろうと不思議に思わ

れてならなかった。それに比べれば、私達はまあどんなに自分の運命を感謝していいのだろう。それなのに、始終、そうでもしていなければ気がすまなくなっているかのように、もうどうでも好いような事をいつまでも心痛している、——そういう自分達がいかにも異様に私に感ぜられて来だした。

林の中から出きらないうちに、もう日がすっかり傾いていた。私は突然或る決心をしながら、おもわず足を早めて帰ってきた。家に著くと、私はすぐ二階の自分の部屋に上っていつて、この手帳を用ようだんす筆筒の奥から取り出してきた。この数日、日が山にはいると急に大気が冷え冷えとしてくるので、いつも私が夕方の散歩から帰るまでに爺やに暖炉に火を焚たいて置くように云いつけてあつたが、その日に限つて爺やは他の用事に追われて、まだ火を焚きつけていなかった。私はいますぐにもその手帳を暖炉に投げ込んでしまいたかつたのだ。が、私は傍らの椅子に腰かけたまま、その手帳を無雑作に手に丸めて持ちながら一種苛いら立だたしいような氣持で、爺やが薪を焚きつけているのを見ている外はなかった。

爺やはそういう苛らしている私の方を一度も振りかえろうとはせずに、黙つて薪を動かしていたが、この人の好い単純な老人には私はそんな瞬間にもふだんの物静かな奥様にしか見えていなかったろう。……それからこの夏私の来るまで此こ処で一人で本ばかり読

んで暮していたらしい菜穂子だつて私にはあんなに手のつけようのない娘にしか思われな
いのに、この爺やにはやっぱり私と同じような物静かな娘に見えていたのだつたらう。そ
してこういう単純な人達の目には、いつも私達は「お為合せな」人達なのだ。私達がどん
なに仲の悪い母娘であるかと云う事をいくら云つて聞かせてみてもこの人達にはそんな事
は到底信ぜられないだろう。……そのときふとこういう気が私にされてきた。実はそうい
う人達——いわば純粹な第三者の目に最も生き生きと映っているだろう恐らくは為合せな
奥様としての私だけがこの世に実在しているので、何かと絶えず生の不安に怯やかされて
いる私のもう一つの姿は、私が自分勝手に作り上げている架空の姿に過ぎないのではない
か。……きようおようさんを見たときから、私にそんな考えが萌して来だしていたのだと
見える。おようさんにはおようさん自身がどんな姿で感ぜられているか知らない。しかし
私にはおようさんは勝気な性分で、自分の背負っている運命なんぞは何でもないと思つて
いるような人に見える。恐らくは誰の目にもそうと見えるにちがいない。そんな風に誰の
目にもはつきりそうと見えるその人の姿だけがこの世に実在しているのではないか。そう
すると、私だつてもそれは人生半ばにして夫に死別し、その後は多少寂しい生涯だったが、
ともかくも二人の子供を立派に育て上げた堅実な寡婦、——それだけが私の本来の姿で、

そのほかの姿、殊にこの手帳に描かれてあるような私の悲劇的な姿なんぞはほんの気まぐれな仮象にしか過ぎないのだ。この手帳さえなければ、そんな私はこの地上から永久に姿を消してしまう。そうだ、こんなものは一思いに焼いてしまうほかはない。本当にいますぐにも焼いてしまおう。……

それが夕方の散歩から帰って来たときからの私の決心だったのだ。それなのに、私は爺やが其処を立ち去った後も、ちよつとその機会を失ってしまったかのように、その手帳をぼんやりと手にしたまま火の中へ投ぜずにいた。私には既に反省が来ていた。私達のような女は、そうしようと思つた瞬間なら自分達にできそうもない事でもしでかし、それをした理由だつてあとからいくらでも考え出せるが、自分がこれからしようとしている事を考え出したら最後、もうすべての事が^{ためら}逡巡^さわれてくる。そのときも、私はいざこれからこの手帳を火に投じようとした時、ふいともう一度それを読み返して、それが長いことを苦しめていた正体を現在のこのような醒^さめた心で確かめてからでも遅くはあるまいと考へた。しかし、私はそうは思つたものの、そのときの気分ではそれをどうしても読み返してみる気にはなれなかつた。そうして私はそれをそのまま、マントル・ピースの上に置いておいた。その夜のうちに、ふいとそれを手にとって読んで見るような気になるまいも

のでもないと思つたからであつた。が、その夜遅く、私は寝るときにそれを自分の部屋の元あつた場所に戻しておくより外はなかつた。

そんな事があつてから二三日立つか立たないうちの事だつたのだ。或る夕方、私がいつものように散歩をして歸つて来てみると、いつ東京から来たのか、お前がいつも私の腰かけることにしている椅子にもた靠れたまま、いましがたぱちぱち音を立てながら燃え出したばかりらしい暖炉の火をじつと見守つていたのは……

その夜遅くまでのお前との息苦しい対話は、その翌朝突然私の肉体に現われた著しい変化と共に、私の老いかけた心にとつては最も大きな傷手いたでを与えたのだつた。その記憶も漸く遠のいて私の心の裡でそれが全体としてはつきりと見え易いようになり出した、それから約一年後の今夜、その同じ山の家の同じ暖炉の前で、私はこうして一度は焼いてしまおうと決心しかけたこの手帳を再び自分の前にひらいて、こんどこそは私のしたことのすべてを贖つくなうつもりで、自分の最後の日の近づいてくるのをひたすら待ちながら、こうして自分の無気力な氣持に鞭むちうちつつその日頃の出来事をつとめて有りのままに書きはじめているのだ。

お前は暖炉の傍らに腰かけたまま、そこに近づいていった私の方へは何か怒ったような大きい目ざしを向けたきり、何とも云い出さなかった。私も私で、まるできのうも私達がそうしていたように、押し黙ったまま、お前の隣りへ他の椅子をもつていつて徐かしずかに腰を下ろした。私はなぜかお前の目つきからすぐお前の苦しんでいるのを感じ、どんなにかお前の心の求めているような言葉をかけてやりたかったろう。が、同時に、お前の目つきには私の口の先まで出かかっている言葉をそこにそのまま凍らせてしまうようなきびしさがあった。どうしてそんな風に突然こちらへ来たのかを率直にお前に問うことさえ私には出来に悪かった。お前もそれがひとりでに分るまでは何とも云おうとはしないように見えた。

漸との事で私達が二言三言話し合つたのは雑司ヶ谷の人達の上ぐらいで、あとはそれが毎日の習慣でもあるかのように二人並んで黙つて焚火たきびを見つめていた。

日は昏くれていった。しかし、私達はどちらもあかりを点つけに立とうとはしないで、そのまま暖炉に向つていた。外が暗くなり出すにつれて、お前の押し黙った顔を照らしている火かげがだんだん強く光り出していた。ときおり焰ほのおの工合でその光の揺らぐのが、お前が無表情な顔をしていればいるほど、お前の心の動揺を一層示すような気がされてならなかった。

だが、山家^{やまが}らしい質素な食事に二人で相変らず口数^{すく}寡なく向った後、私達が再び暖炉の前に帰っていつてから大ぶ立ってからだった。ときどき目をつぶったりして、いかにも疲れて睡たげにしていたお前が、突然、なんだが上ずったような声で、しかし爺やたちに聞かれたくないように調子を低くしながら話し出した。それは私もうすうす察していたように、やっぱりお前の縁談についてだった。それまでも二三度そんな話を他から頼まれて持ってきたが、いつも私達が相手にならなかった高輪^{たかなわ}のお前のおばが、この夏もまた新しい縁談を私のところに持ってきたが、丁度森さんが北京でお亡くなりになったりした時だったので、私も落ち着いてその話を聞いてはいられなかった。しかし二度も三度もうるさく云って来るものだから、しまいには私もつい面倒になって、菜穂子の結婚のことは当人の考えに任せる事にしてありますら、と云って帰した。ところがお前が八月になって私と入れ代りに東京へ帰ったのを知ると、すぐお前のところに直接その縁談を勧めに来たらしかった。そしてそのとき私が何もかもお前の考えのままにさせてあると云った事を妙に楯にとつて、お前がそれまでどんな縁談を持ちこまれてもみんな断わってしまうのを私までがそれをお前の我^{わが}儘^{まま}のせいに行っているようにお前に向って責めたらしかった。私がそう云ったのは、何もそんなつもりではない位な事は、お前も承知していい筈だった。そ

れだのに、お前はそのときお前のおばにそんな事で突込まれた腹立ちまぎれに、私の何の悪気もなしに云った言葉をもお前への中傷のようにとったのだろうか。少なくとも、いまお前の私に向ってその話をしている話し方には、私のその言葉をも含めて怒っているらしいのが感ぜられる。……

そんな話の中途から、お前は急に幾分ひきつったような顔を私の方へもち上げた。

「その話、お母様は一体どうお思いになつて？」

「さあ、私には分らないわ。それはあなたの……」いつもお前の不機嫌そうなときに云うようなおどおどした口調でそう云いさして、私は急に口をつぐんだ。こんなお前を避けるような態度でばかりはもう断じてお前に対すまい、私は今宵こそはお前に云いたいだけのことを云わせるようにし、自分もお前に云っておくべきことだけは残らず云っておこう。

私はお前のどんな手きびしい攻撃の矢先にもまともに耐えて立ってしようと決心した。で、私は自分に鞭うつような強い語気で云い続けた。「……私は本当のところをいうとね、その御方がいくら一人息子でも、そうやって母親と二人きりで、いつまでも独身でおとなしく暮していらしたというのが気になるのよ。なんだか話の様子では、母親に負けているような気がしますわ、その御方が……」

お前はそう私に思いがけず強く出られると、何か考え深そうになって燃えしきっている薪を見つめていた。二人は又しばらく黙っていた。それから急にいかにもその場で咄嗟^{とつさ}に思いついたような不確かな調子でお前が云った。

「そういうおとなし過ぎる位の人の方がかえって好きそうね。私なんぞのような氣ばかり強いものの結婚の相手には……」

私はお前がそんなことを本気で云っているのかどうか試^{ため}すようにお前の顔を見た。お前は相変らずぱちぱち音を立てて燃えている薪を見据えるようにしながら、しかもそれを見ていないような、空虚な目ざしで自分の前方をきつと見ていた。それは何か思いつめていのような様子をお前に与えていた。いまお前の云ったような考え方が私への厭味^{いやみ}ではなしに、お前の本氣から出ているのだとすれば、私はそれには迂濶^{うかつ}に答えられないような氣がして、すぐには何とも返事がせられずにいた。

お前が云い足した。「私は自分で自分のことがよく分っていますもの。」

「……………」私はいよいよ何と返事をしたらいいか分らなくなつて、ただじつとお前の方を見ていた。

「私、この頃こんな氣がするわ、男でも、女でも結婚しないでいるうちはかえって何かに

束縛されているような……終始、脆い、移り易いようなもの、例えば幸福なんていう幻影に囚われているような……そうではないのかしら？　しかし結婚してしまえば、少なくともそんなはないものからは自由になれるような気がするわ……」

私はすぐにはそういうお前の新しい考えについては行かれなかった。私はそれを聞きながら、お前が自分の結婚ということを当面の問題として真剣になって考えているらしいのに何よりも驚いた。その点は、私はすこし認識が足りなかった。しかし、いまお前の云ったような結婚に対する見方がお前自身の未経験な生活からひとりで出来てきたものかどうかと云うことになるといささか懐疑的だった。――私としては、このままこうして私の傍でお前がいらいらしながら暮していたら、互いに気持ちをこじらせ合ったまま、自分自分かどなどところへ行ってしまうか分らないと云ったような、そんな不安な思いからお前が苦しまぎれに縫^{すが}りついている、成熟した他人の思想としてしか見えないのだ……「そういう考え方はそれはそれとして肯^{うなず}けるようだけれど、何もその考えのためにお前のように結婚を向きになって考えることはないと思うわ……」私はそう自分の感じたとおりのことを云った。「……もうすこし、お前、なんていったらいいか、もうすこし、そうね、暢^{のんき}気になれないこと？」

お前は顔に反射している火かげのなかで、一種の複雑な笑いのようなものを閃かせながら、

「お母様は結婚なさる前にも暢気でいられた？」と突込んで来た。

「そうね……私は随分暢気な方だったんでしよう、なにしろまだ十九かそこいらだったから。……学校を出ると、うちが貧乏のため母の理想の洋行にやらせられずに、すぐお嫁にゆかせられるようになったのを大喜びしていた位でしたもの。……」

「でも、それはお父様が好いお方なことがお分りになっていられたからではなくって？」

お前の好いお父様の話がいかにも自然に私達の話題に上ったことが急に私をいつになくお前のまえて生き生きとさせ出した。

「本当に私にはもつた位に好いお父様でした。私の結婚生活が最初から最後まで順調に行つたのも、私の運が好かつたのだなどとは一度も私に思わせず、そうなるのがさも当り前のように考えさせたのが、お父様の性格でした。ことに私がいまでもお父様に感謝しているのは、結婚したてはまだほんの小娘に過ぎなかった私を、はじめからどんな場合にでも、一個の女性としてばかりでなく、一個の人間として相手にして下すつたことでした。私はそのおかげでだんだん人間としての自信がついてきました。……」

「好いお父様だったのね。……」お前までがいつになく昔を懐かしがるような調子になって云った。「私は子供の自分よくお父様のところへお嫁に行きたいなあと思っていたものだわ。……」

「……………」私は思わず生き生きした微笑をしながら黙っていた。が、こういう昔話の出際に、もうすこしお父様の生きていらした頃のことや、お亡くなりになった後のことについてお前に云って置かなければならない事があると思つた。

が、お前がそういう私の先を越して云った。こんどは何か私に突つかかるようなしゃが囁れ声だつた。

「それでは、お母様は森さんのことはどうお思いになつていらつしやるの？」

「森さんのこと？……」私はちよつと意外な問いに戸惑いしながら、お前の方へ徐々に目をもつていった。

「……………」こんどはお前が黙つてうなず頷いた。

「それとこれとは、お前、全然……」私は何となく曖あいまい昧な調子でそう云いかけているうちに、急にいまのお前のこたわつたようなものの問い方で、森さんが私達の不和の原因となつたとお前の思い込んでいたものがはつきりと分つたような気がした。ずっと前に亡く

なられたお父様のことがいつまでもお前の念頭から離れなかったのだ。あの頃のお前は私というものがお前の考えている母というものから抜け出して行ってしまうそうだったので気が気でなかったのだ。それがお前の思い過しであったことは、いまのお前ならよく分るだろう。けれども、そのときは私もまた私でお前にそれがそうであることを率直に云つてやれなかった、どうしてだかそんな事までが自分の思うように云えないように事物をすこし込み入らせて私は考えがちであった、いわば私の唯一の過失はそこにこそあったのだ。いま、私はそれをお前にも、また私自身にもはつきりと言ひ聞かしておかなければならないと思つた。「……いいえ、そんな云いようはもうしますまい。それは本当に何でもない事だったのが私達にはつきり分つて来ているのですから、何でもない事として云います。森さんが私にお求めになったのは、結局のところ、年上の女性としてのお話し相手でした。私なんぞのような世間知らずの女が気どらずに申し上げたことが反つて何となく身にしみてお感ぜられになっただけなのです。それだけの事だったのがそのときはあの方にも分らず、私自身にも分らなかつたのです。それは只の話し相手は話し相手でも、あの方が私にどこまでも一個の女性としての相手を望まれていたのがいけなかつたのでした。それが私をだんだん窮屈にさせていったのです。……」そう息もつかずに云いながら、私はあんま

り暖炉の火をまともに見つづけていたので、目が痛くなつて来て、それを云い終るとしばらく目を閉じていた。再びそれを開けたときは、こんどは私はお前の顔の方へそれを向けながら、「……私はね、菜穂子、この頃になつて漸と女ではなくなつたのよ。私は随分そういう年になるのを待つていました。……私は自分がそういう年になれてから、もう一度森さんにお目にかかつて心おきなくお話の相手をして、それから最後のお分れをしたかったのですけれど……」

お前はしかし押し黙つて暖炉の火に向つたまま、その顔に火かげのゆらめきとも、又一種の表情とも分ちがたいものを浮べながら、相変らず自分の前を見据えているきりだった。その沈黙のうちに、いま私が少しばかり上ずつたような声で云つた言葉がいつまでも空虚に響いているような気がして、急に胸がしめつけられるようになった。私はお前のいま考えていることを何とでもして知りたくなつて、そんな事を訊くつもりもなしに訊いた。

「お前は森さんのことをどうお考えなの？」

「私？……」お前は唇を嚙んだまま、しばらくは何とも云い出さなかつた。

「……そうね、お母様の前ですけれど、私はああいう御方は敬遠して置きたいわ。それはお書きになるものは面白いと思つて読むけれども、あの御方とお付き合ひしたいとは思ひ

ませんでしたわ。なんでも御自分のなさりたいと思うことをしていいと思っっているような天才なんていうものは、私は少しも自分の側そばにもちたいとは思っていませんわ。……」

お前のそういう一語々々が私の胸を異様に打った。私はもう為しやう様がないといった風に再び目を閉じたまま、いまこそ私との不和がお前から奪ったものをはつきりと知った。それは母としての私ではない、断じてそうでない、それは人生の最も崇高なものに対する女らしい信徒なのである。母としての私は再びお前に戻されても、そういう人生への信徒はもう容易には返されないのでなかろうか？……

もう夜もだいふ更ふけたらしく、小屋の中までかなり冷え込んでいた。さきに寝かせであつた爺やがもう一寝入りしてから、ふと目を覚ましたようで、台所部屋の方から年よりのらしい咳払いのするのが聞え出した。私達はそれに気づくと、もうどちらからともなく暖炉に薪を加えるのを止めていたが、だんだん衰え出した火力が私達の身体を知らず識しらず互いに近よらせ出していた。心と心とはいつか自分自分の奥深くに引込ませてしまいがら……

その夜は、もう十二時を過ぎてから各自の寢室に引き上げた後も、私はどうにも目が冴

えて、殆どまんじりとも出来なかった。私は隣りのお前の部屋でも夜どおし寝台のきしるのを耳にしていた。それでも明け方、漸く窓のあたりが白んでくるのを認めると、何かほつとしたせいか、私はついうとうとと睡んだ。まどろが、それからどの位立ったか覚えていないが、私は急に何者かが自分の傍らに立ちはだかっているような気がして、おもわず目を覚ました。そこに髪をふりみだしながら立っている真白な姿が、だんだん寝巻きのままのお前に見え出した。お前は私がやつとお前を認めたことに気がつく、急におこったような切口上で云い出した。

「……私にはお母様のことはよく分っているのよ。でも、お母様には、私のことがちつとも分らないの。何ひとつだつて分つて下さらないのね。……けれども、これだけは事実としてお分りになっておいて頂戴。私、こちらへ来る前に実はおば様にさっきのお話の承諾をして来ました。……」

夢とも現ともつかないような空ろな目ざしでお前をじつと見つめている私の目を、お前は何か切なげな目つきで受けとめていた。私はお前の云っている事がよく分らないように、そしてそれを一層よく聞こうとするかのように、殆ど無意識に寝台の上に半ば身を起そうとした。

しかし、そのときはお前はもう私の方をふりむきもしないで、素早く扉のうしろに姿を消していた。

下の台所ではさつきからもう爺やたちが起きてござござと何やら物音を立て出していた。それが私にそのまま起きてお前のあとを追って行くことをためらわせた。

私はその朝も七時になると、いつものように身だしなみをして、階下に降りていった。私はその前にしばらくお前の寢室の気配に耳を傾けてみたが、夜じゅうときどき思い出したようにきしっていた寢台の音も今はすっかりしなくなっていた。私はお前がその寢台の上で、眠られぬ夜のあとで、かきみだれた髪の中に顔を埋めているうちに、さすがに若さから正体もなく寝入ってしまうと、間もなく日が顔に一ぱいあたり出して、涙をそれとなく乾かしている……そんなお前のしどけない寢姿さえ想像されたが、そのままお前を静かに寝かせておくため、足音を忍ばせて階下に降りてゆき、爺やには菜穂子の起きてくるまで私達の朝飯の用意をするのを待っているように云いつけておいて、私は一人で秋らしい日の斜めに射して木かげの一ぱいに拡がった庭の中へ出て行った。寢不足の目には、その木かげに点々と落ちこぼれている日の光の工合が云いようもなく爽やかだった。私はもう

すつかり葉の黄いろくなつた榆の木の下のベンチに腰を下ろして、けきの寝ぎめの重たい気分とはあまりにかけはなれた、そういう^{かがや}赫かしい日和^{ひより}を何か心臓がどきどきするほど美しく感じながら、かわいそうなお前の起きてくるのを心待ちに待っていた。お前が私に対する反抗的な気持からあまりにも向う見ずな事をしようとしているのを断然お前に^{かんし}諫止しなければならぬと思った。その結婚をすればお前がかならず不幸になると私の考える理由は何ひとつない、ただ私はそんな気がするだけなのだ。——私はお前の心を閉じてしまわせずに、そのところをよく分つて貰うためには、どういうところから云い出したらいいのであろうか。いまからその言葉を用意しておいたって、それを一つ一つお前に向つて云えようとは思えない、——それよりか、お前の顔を見てから、こちらが自分をすつかり無くして、なんの心用意もせずにお前に立ち向いながら、その場で自分に浮んでくることをそのまま云つた方がお前の心を動かすことが云えるのではないかと考えた。……そう考えてからは、私はつとめてお前のことから心を^そ外らせて、自分の頭上の真黄いろな榆の木の葉がさらさらと音を立てながら絶えず私の肩のあたりに^ま撒き散らしている細かい日の光をなんて気持がいいんだろうと思つているうちに、自分の心臓が何度目かに^{はげ}劇しくしめつけられるのを感じた。が、こんどはそれはすぐ止まず、まあこれは一体どうしたのだらう

と思ひ出した程、長くつづいていた。私はその腰かけの背に両手をかけて漸との事で上半身を支えていたが、その両手に急に力がなくなつて……

菜穂子の追記

此處で、母の日記は中絶している。その日記の一番終りに記されてある或る秋の日の小さな出来事があつてから、丁度一箇年立つて、やはり同じ山の家で、母がその日のことを何と思ひ立たれてか急にお書き出しになつていらした折も折、再度の狭心症の発作に襲われてそのままお倒れになつた。この手帳はその意識を失われた母の傍らに、書きかけのまま開かれてあつたのを爺やが見つけたものである。

母の危篤の知らせに驚いて東京から駆けつけた私は、母の死後、爺やから渡された手帳が母の最近の日記らしいのをすぐ認めたが、そのときは何かすぐそれを読んで見ようという気にはなれなかつた。私はこのまま、それを〇村の小屋に残してきた。私はその数箇月前に既に母の意に反した結婚をしてしまつていた。その時はまだ自分の新しい道を伐り拓きひらこうとして努力している最中だったので、一たび葬つた自分の過去を再びふりかへつて見

るような事は私には堪え難いことだったからだ。……

その次ぎに又〇村の家に残して置いたものの整理に一人で来たとき、私ははじめてその母の日記を読んだ。この前のときからまだ半年とは立っていないが、私は母が気づかっていたように自分の前途の極めて困難であるのを漸く身にしみて知り出していた折でもあった。私は半ばその母に対する一種のなつかしさ、半ば自分に対する悔恨から、その手帳をはじめて手にとったが、それを読みはじめるや否や、私はそこに描かれている当時の少女になったようになって、やはり母の一言々に小さな反抗を感じずにはいられない自分を見出した。私は何としてもいまだにこの日記の母をうけいれるわけにはいけないのである。

——お母様、この日記の中のように、私がお母様から逃げまわっていたのはお母様自身からなのです。それはお母様のお心のうちにだけに在る私の悩める姿からなのです。私はそんな事でもって一度もそんなに苦しんだり悩んだりした事はございませんもの。……

私はそう心のなかで、思わず母に呼びかけては、何遍もその手帳を途中で手放そうと思しながら、やっぱり最後まで読んでしまった。読み^{おわ}了つても、それを読みはじめたときから私の胸を一ぱいにさせていた憤懣^{ふんまん}に近いものはなかなか消え去るようには見えなかった。

しかし気がついてみると、私はこの日記を手にしたまま、いつか知らず識らずのうちに、一昨年の秋の或る朝、母がそこに腰かけて私を待ちながら最初の発作に襲われた、大きな楡の木の下に来ていた。いまはまだ春先で、その楡の木はすっかり葉を失っていた。ただそのときの丸木の腰かけだけが半ば毀れながらまだ元の場所に残っていた。

私がその半ば毀れた母の腰かけを認めた瞬間であつた。この日記読了後の一種説明しがたい母への同化、それ故にこそ又同時にそれに対する殆ど嫌悪にさえ近いものが、突然私の手にしていた日記をそのままその楡の木の下に埋めることを私に思い立たせた。……

青空文庫情報

底本：「堀辰雄集 新潮日本文学16」新潮社

1969（昭和44）年11月12日発行

1992（平成4）年5月20日16刷

入力：横尾、近藤

校正：松永正敏

2003年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

楡の家

堀辰雄

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>